

# ◎シリーズ 長岡京歴史散歩

(118)

## 神足小学校区の遺跡② 一里塚と道路元標

アゼリア通り(長岡京市役所南側の道)と西国街道の交差点の片隅にアスファルトに埋もれた標石がひっそりと建っています。ここは「一里塚の交差点」と呼ばれ、かつて一里塚があったところです。

一里塚は一里(約4キロ)ごとに道路両側へ建てられた塚で、旅人がどれぐらい歩いたか、旅の目印になっていました。一里塚が制度として確立したのは、江戸時代初めのことで、幕府は慶長9(1604)年に江戸を起点として東海道・東山道に榎を植えた一里塚を築かせ全国に普及させました。

神足にある一里塚は西国街道の起点東寺口(とうじぐち)から二里(約8キロ)にあたります。いまは家が建ち、一里塚は残っていませんが、近くには「一里塚」の地名があります。ただ、この地名は昭和45年に



▲村絵図に描かれた一里塚  
(江戸時代、古市区有文書)

中層マンションが建設され、住宅街ができた際に新しく付けられたものです。江戸時代の村絵図には、交差点の両側の盛り土に大きな木が生える一里塚が描かれています。

ところで、アスファルトに埋もれた標石をみると、「新神足村」と刻まれており、大正9年ごろにつくられた道路元標とわかります。よく「〇〇市から〇〇町まで××km」と表示されることがありますが、その基準となるのが道路元標です。道路元標が設置されたのは戦前のことで、市町村単位での道路の起点として大正8年の道路施行令に基づき、全国で1万2千余りの道路元標が建てられ、道路整備が始まったのです。長岡京市内では、新神足村、乙訓村、海印寺村にそれぞれ1基ずつありました。標石の大きさも25坪角で、高さ60坪と決められていました。

神足にあった一里塚や道路元標は、西国街道における江戸時代から戦前までの歴史の生き証人であり、日本における道路整備プロジェクトの遺産として後世に守り伝えていきたいものです。



▲新神足村の道路元標  
(開田二丁目)